

1 免疫抑制剤療法の尿路上皮に及ぼす影響
2 ～尿沈渣検査の重要性について～
3

4 ○石川政志 太田修司 宇野敦子 川野祐一 仲間盛之
5 高橋邦昭 小関満 藤澤紀良 (NHO 千葉東病院)
6

7 **【目的】**免疫抑制療法の進歩により、腎臓移植にお
8 ける移植腎の生着率は格段に向上してきたが、日和
9 見感染及び潜在的ウイルスの再活性化によるウイル
10 ス感染様細胞を尿沈渣で散見することがある。今回
11 我々は、ウイルス感染様細胞の検出が BK ウイルス腎
12 症の早期発見に繋がった経験から、尿沈渣と移植後
13 免疫抑制療法との関係及び BK ウイルスとの関連性
14 について再評価を行ったので報告する。

15 **【方法】**2011年3月から2011年10月の間に移植後
16 定期検査に含まれる尿沈渣検査において、ウイルス
17 感染様細胞の出現を認めた45件(19名)に対して、
18 ①血中もしくは尿中BKV-DNA定量値陽性率、②使用
19 免疫抑制剤、③初回報告時血中薬物濃度(トラフ値)
20 について調査した。

21 **【結果】**①尿中BKV-DNA定量陽性:36/42件(85.7%)
22 血中BKV-DNA定量陽性:18/45件(40.0%)であった。
23 ②使用免疫抑制剤:タクロリムス14人、シクロスポ
24 リン5人であった。③血中薬物濃度:タクロリムスに
25 ついては、5.0ng/ml未満が4名、5.0~10.0ng/ml
26 未満が10名。シクロスポリンについては、200ng/ml
27 未満が4名、200~300ng/ml未満が1名であった。

28 **【考察】**タクロリムスの強力な免疫抑制効果がBK
29 ウイルスの再活性化に関与していることが示唆され
30 た。血中薬物濃度は低濃度でも尿中にウイルス感染
31 様細胞が出現していることから、薬剤に対する反応
32 には個人差があると考えられた。尿沈渣検査は、免
33 疫抑制療法の経過観察には必須な検査であると考え
34 る。

35 **【結論】**移植後の免疫抑制療法を行っている症例で
36 は、尿沈渣検査によって感染様細胞の有無を記載報
37 告することが、BKウイルス性腎炎の早期発見に大き
38 く寄与する。